

《論 文》

社会学における本質的ということ

Der Kampf der Vernunft besteht darin, dasjenige, was der Verstand fixiert hat, zu überwinden, —G. W. F. Hegel—¹⁾

山下淳志郎

1. 方法論上の問題—問題の所在—

科学は懐疑に始まると云うのは極めて常識的な命題である。確かに近代においても科学は懐疑とともに始まった云われうる。近代哲学の始祖と云われるデカルト (R. Descartes) の懐疑はその懐疑の典型であるとみられるが、また批判哲学のカント (I. Kant) にその批判的思惟の着想を抱かせたのは、ロック (J. Locke) を継承して経験論を徹底させた結果、それを疑うに至ったヒューム (D. Hume) である。しかしこの近代の科学における懐疑は古代における懐疑とは質的には全く異なり、云うならば180度の相違を示している。つまり古代においては対象における真理の存在は疑われず、ただその認識、把握の完全性や、あるいは認識、把握がなされたとしても、その真理についての言表伝達の完全性に疑問が抱かれたからであり、それに反し近代においては真理は対象に対する認識、把握の在り方、方法に依拠していると云う如く、真理は完全に対象、客体に対する認識主観、主体に存するという思考転換がなされたのである。カントのいわゆるコペルニクス展開はこの点にあり、彼は「我々が認識することのできるのは、物自体 (Ding an sich) としての対象ではなくて、感性的直感対象としての物

——換言すれば現象としての物だけである。』²⁾と云うが、更に「直観における多様なものの総合的統一は、ア・プリオリに与えられた物として、私のあらゆる一定の思惟にア・プリオリに先立つところの統覚の同一性そのものの根拠なのである。しかし結合は対象のうちに存するのではない、また知覚によって対象から得られ、こうして初めて悟性のうちに取り入れられるようなものではあり得ない。この根源的結合は、こうしてまったく悟性のなすわざである。すなわち悟性は、ア・プリオリに結合する能力であり、また直観における多様な表象を統覚によって統一する能力にはかならない。そしてこの統覚の統一という原則こそ、人間の認識全体の最高の原理である」³⁾からであると云い、更にまたこの悟性の原理は「経験を可能ならしめる原理、即ち感官の対象の経験的認識」の「構成原理 (konstitutives Prinzip)」⁴⁾であるともいう。確かにカントによるこの思考転換は「化石化」し「古びた自然観」に突破口を開き、以後の自然科学研究における「あらゆる進歩への跳躍点」⁵⁾となったことに、また我々によって認識されえない物自体 (Ding an sich) は追求されるべき真理を指し示す科学の目標、理念として積極的意義を持っているが、他方物自体 (Ding an sich) は、我々の先天的感性的直観形式と

悟性概念(範疇)に則った綜合統一の結果としての、我々に認識されうる現象の背後に永久に不可知のものとして残されるという消極的意義をもち、ここから反科学的、非科学的非合理主義、神秘主義を生み出しもするのである。そこで我々はカントの提起したこの思考転換問題を改めて科学方法論上の問題として取り上げてみる必要があるであろう。

確かにカントの提起した思考転換の積極的意義は十分に評価されるが、それは特に自然科学領域において妥当する方法論として評価されるものである。しかし今此处で問われなければならないのは社会科学領域における方法論の問題である。自然科学における対象は自然そのものの、自然物そのものではなく、それらに触発され、感性的直観の制約を通して与えられた諸直観が悟性概念たる範疇の制約に則り綜合統一され、方法論的に科学の対象として論理構成された表象に過ぎない現象であるとしても、此处で見られるそれ自体の相において我々に対して未知的なままの物自体(B. 164)は、我々によって構成され、産出されることのないそれ独自に存在する客観的存在である。しかし社会科学領域における対象はそれ自体、我々人間が産出、構成し、またそれによって我々人間が支配され動かされるところのもの、つまり主体としての我々人間に対して客体として相互作用の関係にある存在であり、しかもカントが提起した方法論上の問題はこの社会科学領域において既になされていたと言われ、これは人間社会の形成に関してホッブス(Th. Hobbes)のリヴァイアサンにおいてなされていたといえる。「神がそれによって世界をつくったところの、そしてそれによって世界を統治するところの技(Art)は、人間の技術 Art によって、他の多くのごとにおけるがごとく、人工的動物をつくりうするという点でも、模倣される。技術 Art は、

さらにすすんで、自然の理性的にしてもっともすぐれた作品たる人間(rational and most excellent work of nature, man)をも模倣する。と云うのは、技術によって、コモンウェルスあるいは国家とよばれるあの偉大なりヴァイアサン LEVIATHAN が創造されるのであるが、それは人工的人間にはかならないからである。」⁶⁾ こうして彼はその素材としての人間の個別的に分析、考察された思考の諸部分をその相互依存関係に基づいて結合し、人工的人間とみなされるリヴァイアサンを生み出すというのである。これはまさしく人間社会についての構成的思考であり、この思考法は更にロックへと受け継がれ、イギリス市民社会の形成理論として展開して行くが、構成的思考法はこのように新しく登場した「市民」が自ら生存に必要な諸要素を構成し、形成する「社会」に関する社会科学領域における思考法として既に用いられていたものであり、これより約一世紀遅れてフランスではコムト(A. Comt)が『社会再組織のために必要な科学的作業案』を公表する如く、社会の改造のための思考法として構成的思考法が用いられて行くのである。しかしカントが「如何にして自然科学は可能であるか」との問題にも答えるべく提起した思考法は、コムトの主張する「実証」を批判的に受け継いだデュルケーム(E. Durkheim)が社会学の方法として主張した自然科学的方法としてアメリカに渡り、ランドバーク(G. A. Lundberg)においてより一層徹底化された数量主義的方法として展開されるが、むしろこの構成的思考法は、既に発展していた産業を移し入れたアメリカにおいてこそ純粹培養的に展開されて行くのである。

イギリスで産業革命が始まって間もなくの1776年、アメリカへの移民者はそれまでの約一世紀に渡る新天地での長い自然との苦闘の勝利の宣言でもある「独立宣言」を行ったが、彼ら

が移住した新天地アメリカこそが、それから再び一世紀後に発表されたダーウィンの進化論に含まれる適者生存の法則の実現の場であると受け止め、彼らは自らをこの新大陸における適者たらしめるべく、またこの大陸を彼らに適合せしめるべく苦闘し、こうして彼らは離れ来た母国の人間ではなく、この新大陸を開発し、彼ら自身に相応しい理想郷を実現する力と確信を抱いた新たな人間、即ちアメリカ人として生存してゆくことになるが、このことはまた、ダーウィンの適者生存の法則がイギリス経験論とカントの実践理性に裏付けられた理想主義に支えられ、アメリカ人独自の思想として「プラグマティズム」を生み出し、展開して行くことでもある。つまり南北戦争によって決定づけられたアメリカの産業の工業化、つまりアメリカの産業革命がその後急速に進展し、民族の統一国家の確立と相俟って社会構造に急激な変動を惹き起こし、こうして社会の再組織化が、即ち工業を主産業とする民族的統一国家を促進するのに相応しい社会への再組織化がもとめられ、この要求に応ずる如くに「プラグマティズム」が成立したのである⁷⁾。

事実開拓時代と云われる農村を基盤としたアメリカの工業を基盤とする都市社会への急激な変動、展開は人々に社会における諸事象やそれらに対する行動に対する確信を改めて検討することを促し、これは先ずパース (C. S. Peirce, 1839-1914) によってなされることになる。彼は『確信の固め方』(The Fixation of Belief, 1877) において「我々がそれに従て行動する心構えを持つところの観念」としての「確信」の四通りの固め方のうち第一の「固執による the method of tenacity」⁸⁾、第二の「権威による the method of authority」⁹⁾、第三の「アプリアリナ the a priori method (啓示、運命などによる一筆者)」¹⁰⁾ 固め方を、これらによる観念

は銘々が自分なりに持つものである故、無意味な論争や混乱の原因となるため斥け、ある行動対象の観念あるいは概念の意味とはその「対象に対する一定の意図のもとでの操作から生ずる肯定的あるいは否定的結果の観察」、即ち「実験」により定められる「対象の性質」であると云う、第四の「科学的方法 the method of scientific investigation」のみを真の「固め方」と見做し¹¹⁾、こうして彼は様々の事象の性質を、それらの事象と関係付けられる人間の行動の結果から明らかにすることにより、観念或いは概念の意味とは、それが惹き起こす我々の行動とその結果によって定まるとするのである¹²⁾。そしてこのパースの結論を引き継ぎ、それを「観念の真理」が定まるとの如く一般化したジェイムズ (Willam James, 1842-1910) にとり、観念が真であるかどうかは行動の実際的結果に関わる事柄であり、それ故「観念の真理性 the truth of an idea」とは観念の有用性であることになり¹³⁾、観念が我々の実際的行動、生活において有用である限り、その観念が真であることになり、それ故また真理は個々人にとり、あるいは個々の状況に応じて存在する個人的なもの、あるいは相対的なものとして唯一ではなく、複数存在することになる。

こうして新天地、アメリカで生まれたプラグマティズムは、パースでは行動に際し常につきまとう、疑惑、不安から出発して如何にして確信を持つかと云う「もがき」、苦闘を通じて「確信の固め方」が探究され、ジェイムズにおいてはこのような疑惑、不安、もがき苦闘は背後に退き、躍動する都市における個々人の自由と云った側面が表面に強く現れ出ている如く、新大陸において新たなアメリカ人として新たな社会を雄々しく、逞しく建設しようとする人々の精神的状況を表したものであり、急速に発達、展開する工業化とそれに対応しての都市社会の

拡大が抱える諸問題を解決すべく成立展開する(都市)社会学にとり有用な方法論上の基盤を与えたのである。

カントが科学における方法論上の大転換をなしたことの背後に、以上の如く既に社会科学領域における思考の大転換が先行している事実があり、しかもこの事実も、人間社会が歴史的な大転換を進めていたと云うことの現実的反映である。ホブズがリヴァイアサンと名付けられたコモンウェルスの創造を構想した時代は、マニファクチュアの展開進行に伴い、増大する工業生産物の市場を求め、それまでの封建的閉鎖社会から広く外部へ勢力を伸長させ、海外各地に植民地を展開させつつあった商業資本主義生成の時代であり、カントが方法論上の大転換を構想していたのは、科学技術の開発、躍進に促され、急速に展開する機械制大工場生産の拡張と広範囲に普及し始めた交通・通信手段の発達、展開により、社会そのものがその根底から激しい勢いで構造的に変革されつつあった、いわゆる産業革命の最中であったのである。資本主義生産は、機械制大工場の存在する都市が中心となり、その外部に広がる農村諸地域から生産力としての労働力と生産資材、原料が集められ、活発に展開して行ったのであり、こうしてそれまでは自営・自立的な完結体として存在していた農村諸地域は都市へ従属させられ、社会全体が都市と農村との支配・従属関係によって被い尽くされ、資本主義生産のための一つの機能的機構・システムに組み立てられてしまったのである。こうして社会の構成的思考は学問としてのよりも、先ずは社会の実践的形成における構成的思考として先行していたのであり、その限りこの思考の構成的思考への大転換は、ただ単に認識論上の転換に止まらず、社会存在そのものの、従って社会学の対象そのものの存在論上の構造的転換であり、認識論上の転換はこ

の対象そのものの転換に応じて生じている反映としての転換である。それ故今此处で問われねばならないのは、社会科学、社会学においては、対象についての存在論の排除は妥当か否かと云うことである。

2. 方法論上の問題=集団と個人、 全体と個との関係、機能的相互関係

産業革命後急速に発達進行し、生産額を著しく増大せしめた機械制大工業生産力の伸長は様々の農村地帯から労働力として大量の人を都市に引き入れたが、都市は、彼らがそれまで互いに密接な触れ合い、意志の疎通を保ちえた生活の場たる農村地域と違い、互いに自己、及び自己の家族の生活を維持するためのみの場、即ち明日再び労働し得るための生活手段としての貨幣を手に入れるため、労働力として雇用主によって定められた一定の労働時間に従って切り売りした自己、及び自己の家族員の生命力再生に必要な休息を暫し取る場でしかありえず、それ故嘗てのような同一居住地内での人間相互の交流は消失し、各人は夫れ夫れ無防備の孤立状態にあり、互いは往々に角逐しあい、生活環境としては全く殺伐とした非人間的なものとなっていたのである。しかしこのような労働者としての彼らは雇用主、資本家に雇用される人間として互いに自己の、また婦女、子供たちの健康を求めて労働時間など、労働条件の改善を求め、階級としての意識を固め、高め、やがて労働者階級として団結し、資本家階級に対立するに至る¹⁴⁾が、此处で我々は社会学上の、またその方法論上の問題を見ることができるのである¹⁵⁾。

資本主義生産の実現において求められるのは何よりも労働力であるが、それは多様な商品中の一商品として貨幣と交換される物である限り、それは飽くまでも個々人が夫れ夫れ所有し、労働力として資本家に貨幣との交換のもとで提供

しうる自己の体力である。つまり此处で問題なのは一雇用主、資本家と一労働者との一対一の原理、原則に基づく関係であり、この一対一の関係原理が資本主義社会の個人主義の原理として存在し、作用しているのである¹⁶⁾。そしてこの原理はまた商品交換の原理としては交換者相互の自由の下でなされる故に、自由の原理としても存在し、作用することになっており、云うならば売る、売らないも自由、買う、買わないも自由であり、このような一対一の個の原理、自由の原理に基づいて商工業者・資本家が作り上げた社会が総合的に民主主義社会と云われるのである。しかし此处で問題なのはこの社会が民主主義ということである。確かに個々人が一対一の関係原理に従い、互いに自由でありうる社会は民主主義でありうるが、問題となるのはこの一対一の関係の「一」、つまり個人はどのような「一」個人であるか、である。これは明らかに個の関係を原理、原則と定め、規定した商工業者・資本家であり、それ故民主主義社会の「民」には自己の心身を時間売りする労働者は含まれず、自由の原理も彼ら労働者には妥当することはないのである。確かに法的、名目的には売る自由、売らない自由、買う自由、買わない自由はあるとしても、それらは商工業者・資本家にとってのみ存在し、労働者は生きて行くためには、自己の心身を時間売りせざるをえず、売らないでいることはできないのである。つまり彼らには自由は存在しないのである。

だが此处でこの点に関連することとしてなお一つ注意せねばならないことがある。それは機械制大工業生産力の伸長に沿っての、規格化された製品の大量生産は必然的にその製品の大量消費を喚起し、この消費は既に展開しつつある鉄道、蒸気船網によって形成可能となったその製品の国内全一市場、更には世界的単一市場における単一（＝均等）価格による交換（流通、

貿易）によって一般化し、人々は国内、世界のどこにいても生活上の物質的便宜さと安逸を手に入れることが可能となったのである。しかしこれは同時にその生活もその規格品によって規格化され、一様・均一化され、更に人間そのものも規格化、一様化、均一化されることであり、それ故人間は個性ある個人として存在することを喪失し、こうして人間は鷲掴み的に画一的な無個性の、いわゆる「大衆」と呼ばれ、社会もこれに対応して消費社会、大衆社会と呼ばれるに至るが、此处で展開する消費は真には資本主義的生産過程の一環としての消費、つまり商品の生産、販売・消費を介しての資本の増殖過程、即ち資本の再生産過程に組み入れられた一過程としての消費であり、それ故大衆としての人間は一方では産業社会と呼ばれる資本の再生産過程に、その生産面での一要員である労働者として組み入れられて存在し、他方ではその過程の消費面での一要員である消費者として組み入れられて存在するのである。しかしここで登場する大衆社会はいわゆる大衆文化を生み出しもするのである。即ち文化は大衆消費財として大衆に供与され、拡散されるのであり、この供与、拡散は、当時既に発達していた印刷機械・技術により大量に高速印刷され、安価で普及せられる新聞、出版物、宣伝広告を介して進められて行くのである。

ところでここで注意されねばならないのは、この新聞の大量印刷と大衆への浸透とそれによる大衆文化の一般化には、それまでは特定のものの専有物であった知識、文化を彼ら大衆が分有するに至ったと云う積極的な歴史的意義が含まれていることである。即ち大衆は、人間生活におけるあらゆる分野、経済、政治、教育、演劇、宗教その他を記事として盛り込んだ新聞を通じて、これまで持ちえなかった知識を、しかもあらゆる事柄についての知識を分かち持つこ

とが出来るようになったのであり、この意味で新聞の大量印刷による普及は従来の知識、文化独占の壁を打ち砕いたのであり、また生活財の面での大量生産による消費生活の大衆化は同様に文化独占の壁を打ち砕いたのである。しかしこの知識・文化の大衆化は真には生産と消費の関係に基づくものであり、大衆は新聞広告により原始的欲求、情動を刺激され、消費意欲、購買衝動をそそられ、より一層高次の消費生活へと駆り立てられて行くのである。こうして此处で登場した新聞は生産者、販売者にとり資本の再生産に必要な消費の増長拡大を可能にする重要な手段として存在することになり、それ故新聞の大衆化により知識を一般に人間が持つに至ったとしても、それは分与されて分有するに過ぎない知識である。一般人はただ関与することを認められた知識に関与するに過ぎず、それ以外のこと、つまり生産者、販売者にとり不利、不都合となることは何も知らされずにいるのである¹⁷⁾。それ故大衆としての人々は様々の知識を持っていると思い、普遍化、即ち大衆化した文化財、生活財を購買を通して与えられ、日常生活の範囲内に安住しているが、併し知識、従って理性の所有者は真実には一般大衆であるのではない。一般大衆はその分有者、それへの関与者であり、それを分かち与える者は彼らに対して別に存在し、消費者に対する生産者がそれである。新聞は一面では万人に対する知識の解放、万人の理性の確立の可能性を持っているが、他方万人の知識、理性を統禦する機能を持ち、むしろこの機能的役割を担わされたものとして作用する。大衆は非合理的無定形の集団として、しかも単に私生活内に留まることのない集団的力を発揮するものとして出現した限り、統治者、支配者はこの大衆を統治、支配にとって有効な一定方向に常に方位付けねばならず、そのために彼らの知識、理性を統禦する必要があり、新

聞はこのための手段として最上の有効性を示し、人々の知識、理性もこうして或る一定方向、一定次元において一般化され、平均化され、その結果人々はその精神、理性の面においても一般化し、その個性を喪失することになる。そこで知識、文化の大衆化と云われる以上のような社会現象、それ故普遍的理性の具体的な社会的存在現象とみなされ¹⁸⁾、一般に《理性の時代》と云われるこの時代は真には理性と云う幻想に被われた、ヘーゲルの用語を借用すれば特定の者、即ち生産者、支配者による《理性の狡智》(die List der Vernunft)¹⁹⁾の時代であり、また別に言い換えれば《道具的理性》(die Instrumentelle Vernunft)²⁰⁾の支配する時代であると云いうる。こうして資本主義産業の展開に伴い、市民社会における大衆全体を被い尽くし、支配している普遍は、真の理性による普遍ではなく、理性の狡智として現象している擬似普遍であり、これは資本主義産業における生産者、支配者により実体化され、国家として存在することになる。云うなれば、資本主義産業の生産者、即ち機械やそれらの設置された大工場等の生産手段を所有し、支配する者が資本の再生産過程全体を統括支配するための手段、機構としてその過程全体に対応する普遍の擬制体である政治的国家を組織立てるのである。

こうして此处で最早明らかなのは普遍・全体と個の分離、遊離である。と云うよりはこの分離はむしろこの政治的国家の支配のため国策として施行される諸政策、諸計画の結果である。支配階級は自らの再生産過程全体の運動を絶えず望ましい状態に維持し続けるべく、それに適合した経済政策、経済計画を国策として設定し、それをあらゆる分野、領域において適切に作用し、しかも大衆に了承されうような処方で政策化し、実行しなければならない。何よりも生産力の保持が設計されねばならないが、そのた

め労働力に関しては量に関して人口、出生率などが、質に関して技術、教育などが問題として取り上げられ、資源確保計画に関しては国内未開発地の開発や国際的に発展途上国の経済援助の名の下での資源開発が取り上げられるなど、種々の事柄がこの施策の対象として設定されるが、こうした施策の下で大衆の個々人は一方では勤勉な良質の労働者として、益々進歩発達する機械、技術に合わせ益々合理化される作業過程にその機能的・一因子同然に貼り付けられ、自己の人格、人間性を枯渇、喪失させ、非人間化の道を下りつつあるのであるが、その同じ大衆の個々人は他方では同じく国の施策の下で自ら優雅と思いなす消費者として再生過程に、貨幣と商品の流通を活性化する機能的従属因子として組み入れられ、いずれの相においても大衆は支配され、従属の位置に置かれ続けており、このようにして支配者と大衆、全体と個は分離したままである。それ故この全体と個との関係に関して、両者間に「亀裂が生じた」或いは「生じている」と云うのは誤りであり、それは支配の手段として機能的に作為、定立されたものである。併し此处で支配の手段としてのこの機能的作為に尚一つの作用を見ることができる。それは大量消費生活の展開、普及により、高度の、しかし自己閉鎖的な消費生活に、大衆消費社会に、従って私生活主義に私人として埋没する大衆の個々人は相互交流、連帯、結合を喪失し、それ故生産面での労働者としての連帯、結合、団結も希薄化し、こうして全体と個の分離、支配・従属の関係も、支配する側にとり都合なように隠蔽されてしまい、これにより全体と個の分離、支配と従属の関係はより一層強化されるばかりか、個々人相互の連帯、結合、団結も益々希薄化の度を増して行くことである。こうして産業の展開に伴い益々拡張する都市化社会は、職を求めて各地から移住し、寄り集まった

人々の居住社会である限り、一方で華やかな商品化された消費文化が賑わうのに反し、他方では殺伐とした居住空間となり、失業、貧困、労働争議、保健医療、老後、介護、福祉、教育、住宅、相互協力、コミュニケーション等々、多くの社会問題発生の温床として存在し続けることとなる。それ故これまで進展してきた資本主義社会は人間にとり真の社会とは云いえない。それは社会の擬制体である。社会全般に普及している大衆文化は消費文化として経済活動の一つの相であり、その限り人間生活そのものではない。人間の生活そのものはそのような経済活動の一つの相のみで留まらない。それは、個人そのものがそれ自体で普遍的であると同様に、それ自体で普遍的である。自然を対象に生産し、科学、芸術等を生み出す人間は、自然そのものが普遍的である限り、それに対応するものとして普遍的であり、近代産業の発達により労働者の生産が社会的富の生産である限り、その労働は社会的な労働として存在し、その結果としての富も当然国家を組織立て社会全体を支配する特定者に帰せられるものではない。

こうして今此处でもう一度初めに云われたカントの言葉に注意してみる必要がある。「経験一般の可能性の条件は経験の対象の可能性の条件である」²¹⁾。或いは「可能的経験一般の先天的条件は同時に経験の対象を可能ならしめる条件である」²²⁾。則ち彼によれば認識の対象はその認識の可能条件により制約されており、規定されていると、従って科学方法論上、認識論が存在論に対し優位していると主張されているのであり、この方法論が社会認識においても採用されているのが一般である。つまり社会認識においても認識方法、或いは認識論がその認識対象を規定し、決定づけていると云う方法論が前提されているのである。しかし対象としての社会そのものはその認識に先立つ人間が自然に

対する実践的協力・協同活動により構成、構築した作品であり、その限り把握認識されるべき対象としての様々の社会問題は認識の方法によって規定され決定されるのではなく、社会そのものの構造変動により生起する問題として、対象としての社会そのもののの中で生起し、存在するものである。

3. 近代資本主義社会形成と方法論上の問題 ー存在論としての問題ー

近代社会は資本主義産業の社会である。それは既に述べられたように資本の増殖再生産過程が社会的な構成・構築体として形象化され、一般化されて存在するものである。それ故この社会構築、構成体の基本原則は産業経済を動かす諸力を総体としての社会的生産力へと構成する力学的原則である。この点社会学が科学として成り立つために探究されねばならないのは人口構成、分布、密度、接触度、交通量、物資の流通度等であると、デュルケームが云う時、彼は明らかに社会構成にとり重要なものとして力学的構成面に注目しているのであるが、総体としての社会的生産力に関して、経済の伸展度に合わせてなされる生産調節のための労働力市場再編成に向けて労働者が絶えず吸収或いは排出される労働力の源としての相対的過剰人口に留め置かれていると、マルクスが述べたとき、彼は力学的な操作がなされていることを洞察していたのである²³⁾。しかしこの力学的な操作を、工業化、都市化の進展するアメリカにおいて社会学の方法として取り入れ、「コムト以来その一つであった伝統的哲学の因習的学派に私の立場を一致させようとするよりは、むしろ自然科学の立場として性格づける²⁴⁾」と云う極めて明白な意識をもって社会学方法論を主張したのがランドバークである。

彼によれば社会学は「人間集団が互いに、ま

た自己以外の環境と協調し合うために長い間の葛藤を通じて発展せしめた伝達可能な適応技術」の中で「最も顕著な成果」としての科学の一つであり、天候の予測が気象学の任務であれば、社会変動の予測を任務とする社会学は、社会現象としての人間の相互関係行動を自然現象と同質の物として取り扱わねばならないとされるが、彼はここで科学の対象は、如何なる科学であれ、「物理学的宇宙内のエネルギーの転移運動」であり、その限り社会学の対象である人間の行動も「刺激と反応の因果関係」としてこの物理的宇宙秩序 (physical cosmos) 内でのエネルギーの転移運動であるとみなし²⁵⁾、こうして彼は人間相互間の活動を「力の場の内のエネルギーの体系」(a system of energy within a field of forces) として「場の理論」²⁶⁾に倣い、人間行動を標準化された測定尺度に従う数量的記号化による関係式で表すと云う、諸対象の操作的定義を行うことにより、社会学を「真正の社会物理学」(a genuine social physics)²⁷⁾として樹立しようとしていたのである。それ故彼の方法論は科学を有効な適応技術と見做すプラグマティズム、人間行動を刺激と反応との因果関係として捉え、数量的関係式でもって定義づけようとする行動主義と操作主義の三つの基本思想によって支えられており、これはまた明らかに悟性の構成的原理に基づいていることでもある。

ところで以上のような科学主義、操作主義を批判して主意主義の立場から社会における「人間の行為体系」を分析、解明しようと努めたパーソンズもまた「経験的連関を対象とする科学的記述は論理的に相互依存し合う諸概念の全体、則ち論理的体系としてあることが科学にとり重要²⁸⁾」である故、社会学理論はカテゴリーに従って関連づけられて論理性を持つ一つの体系としてあらねばならず、経験的現象の相互関係の「静態的」側面を、「単位としての一定数の粒子、

その属性である質量、その相対的位置、運動の速度、方向と云った相互関係から成り立つ力学的体系構造にならって」採用した「構造」概念に準拠して理論化し²⁹⁾、他方また過去の現象、過程や未来の予想等の因果的説明と分析的知識の必要から、「有意味な概念として採用された機能概念」による「体系内の動態的可変的要素」の把握としての『法則』への到達という動態分析を「体系内の動態的側面の把握、記述」として、体系内の「静態的な構造的諸カテゴリーやそれらに関連する特殊な事例説明に繋ぎ合わせ³⁰⁾、こうして「構造－機能的体系」を構成するのであり、この限り彼もまたランドバークと同じく悟性レベルの構成原理に基づいていることになる。しかしここでパーソンズは悟性的段階に止まらず、更に人間の行為体系の総体を総体的に把握しようとし、『社会類型－進化と比較－』(Societies – Evolutionary and Comparative Perspectives)において社会体系等四種の主要な下位体系を含む総体としての人間の行為体系を考察しているが、「一つの体系としての社会の中核は、それを通じて人々の生活が集合的に組織される、パターン化された規範的秩序である (The core of a society, as a system, is the patterned normative order through which the life of a population is collectively organized).」³¹⁾と云い、この秩序規範の正当性こそが「社会と文化の相互連関に関して何よりも必要な中心的機能であり」³²⁾、しかもこの「正当性の体系」が、それに「関係付けられ、有意味的に依拠して」いるところの、「究極的リアリティと秩序づけられた関連をもっている素養育成 (a grounding)³³⁾」は「常にある意味では宗教的」である故、「正当性の様式はその宗教的志向にその基礎をおいている」³⁴⁾が、「社会の規範的秩序を正当化する場合には、文化的価値パターンが、社会体系と文化体系の

間の最も直接的な絆を提供する」と云うとき、彼の云う社会体系等四種の主要な下位体系を含む総体としての人間の行為体系は総体としての社会ではなく、むしろ四種の下位体系を内属せしめている《国家》であると(彼はそのような述べているのではないが)、考えられて来る。従ってそうであれば、社会の上位にあり、上から下に向けて全体の秩序を統括する価値としての究極的リアリティ (the “ultimate reality”) を持続的に保持、実現遂行する主体として存在する国家を総体としての人間諸個人の相互関係としての行為体系に置き換え、隠蔽することにより、その相互関係が生み出す社会をその一下位体系へと引き下げることで、社会学は国家に奉仕する婢としての学とされることになるのである。彼が「社会体系内において財と人的資力 (goods and manpower) いずれにもわたる可動的な経済資源の減少が国家の統治構造維持に与えた否定的な結果」³⁵⁾に注目し、また「変動の主要なパターンと過程を考察するに当たり、最高次のサイバネティックスのレベルに強調点を置いたのであり、このレベルは社会的というよりもむしろ文化的であって、文化的カテゴリー内では世俗的というよりはむしろ宗教的である」³⁶⁾というとき、彼にはアメリカと云う資本主義国家の統治構造維持が潜在的に意識されていたのであろう。「国家はその本性からして宗教と同じ性質をもったものである。国家それ自身の存在に結びついた国家の宗教性が存在するのである。(L'État est dans son essence de même nature que la religion. …… Il y a une religiosité d'État, liée à l'existence de l'État lui-même)³⁷⁾」

こうしてここで当然見られるのはヘーゲルの国家論である。彼においては国家論は本来的には彼の思想体系全体を通じて見られる「自由の実現」と云う彼の倫理観の具体的現実体として

位置付けられる筈のものである。すなわち人間の人間としての自己形成、自己実現、完成化とそれへの努力が彼の倫理観の根源としてあるのであり、国家は家族の原理と市民社会の原理を結合、統一したものととして、普遍的なものの実現にのみ関心を寄せ、その実現に努め、また諸個人に対しては普遍的な行為様式として自己の普遍的なものを示すのである。則ち国家はその直接的な形態としては習俗として現れ、更には憲法（国内法）として現れる事により、個々人の人格をその侵害から保護し、個々人の福祉を増進し、家族を保護し、また市民社会を指導するが、個人にとっては国家は自己の活動の目的、所産として、自覚された理性的普遍者であり、個人はそれにその成員として参与することによってのみ客観性を得、人倫的（倫理的）でありうるのである。それ故国家は明らかに一つの独立的統一体であることになるが、ここでヘーゲルはこの独立性、統一性を現実的に具現するものとしての「君主」の存在の必然性を、しかもその世襲制の必然性を主張することにより、彼においては何よりも先ず「自由の実現」として見られた「倫理性」は実質的に後退し、当時欧州諸国で広がりつつあり、プロイセンにおいてもメッテルニヒトにより進められていた復古反動の政治傾向と結び付き、その根拠づけを与える結果となったのであるが、その国家の前段階に位置付けられている「市民社会」は彼によれば「欲望の体系」としての「精神的動物の国」³⁸⁾と見られ、その限り「外的国家」「悟性国家」³⁹⁾であるとさえみられ、君主の治める「国家」がその下に属す市民社会を、天上から下界を支配するように、管理、統治、支配するのである。「家族と市民社会は国家の前提であり、そのまさに活動的な要素である。だがヘーゲルではその関係は転倒している。」「ヘーゲルは自分の思考を対象から展開させない」⁴⁰⁾と云われうる

のである。しかし青年時代にヘーゲルにとり「これは輝かしい日の出である」と云い、歓喜したフランス革命は、「自由の思想、理念の自己実現」過程の現れであった。彼が求めたのはこの「自由の思想、理念の実現」であり、その実現に至る運動の魂⁴¹⁾（思想・論理）をフランス革命に至るまでの人類の世界史を通じて学び、人々に提示することであった。彼は対象の存在と運動と、それに絶えず相互関係を保ちながら向き合い、学びつつ自己を高め、あるいは深め行く認識と概念の努力を通じて、その対象と運動の論理を明らかにしようとするのである。

4. 社会学における対象と認識

社会学の対象は社会そのものである。それは既に述べられたことであるが、明らかに人間が自然の諸資源を用い、自らの生活に適しい仕方で、自らの生活に適しい様式へと、自らの手で構成、構築したものであり、その構成、構築には、例えばアリストテレスの四原因や十個の範疇のような種々の要因が働いており、悟性のレベルの構成原理が働いている。云うならばこれまでランドバーク、パーソンズの理論に関して、それが構成原理の支配する悟性レベルに留まるものであると批判的に述べて来たが、この構成原理の働く悟性レベルそのものを否定することはできない。むしろそれは求められる総体的認識、把握にとり、その一段階を排除することにより、自己矛盾を犯すと云う、逆に非常な誤りを犯すこととなる。重要なのは対象についての認識、把握そのものが、対象そのものの総体性に対応して総体的であることである。悟性レベルの点でパーソンズが批判されるのは、なによりも彼の云う行為体系がそこで機能している環境（場）として考えられている「究極的リアリティ」は何のために設定されているか、と云う点においてであり、それは社会（体系）を下位

に置く人間的行為体系（真には国家）の統治・支配者の秩序維持にとり有効な原理として存在するものであり、それ故外面上は大衆としての個々人の社会であるように見える社会もこの究極的リアリティに基づく社会規準、文化的価値に沿って操作的に秩序づけられ、こうして特定者の社会として存在する、という点で批判されるのである。

社会を築く主体は普遍的な社会的富を生み出す者、即ち労働者であると共に、日々の生活を人間として生きる消費者である。そしてこの人々がその生活の中で個人としても、家族の一員としても、また社会の中の種々の部所、場面に属す者としても様々の経験を通じて多様な体験を重ねる。多様な体験、それは喜怒哀楽に満ちた、云わば人間悲喜劇の織り成す一巻きの織布、これが社会であり、更には歴史であると見られよう。社会を認識し、把握しようとする者の眼前に展開する社会はこのような社会である。そしてこのような社会の中であって個々人が抱く喜怒哀楽は、その個々人銘々が直接的に持つ関心領域やそれを越え出た領域から、真にはそうではないが、突如と思われる程に降りかかる出来事、災難に原因している。そこで先ず注意されるのは、この個々人が第一次的に抱き、その中に定着している彼にとっての有意義的世界である。それは自己中心の、云わば「各自性」の世界であり、自己の利害関心に直接結びついており、自己が直接観察し、部分的にであれ、自己の行為により変化させ、再調製して支配することができる範囲であるが、このためには状況における KNOW-HOW を持っていることを必要とする世界でもある。ところでこの持つことを必要とする KNOW-HOW は自己中心の直接的な世界から得られるものではなく、それは自己を越えていながら、自己に対し外的拘束力として影響を与えるように自己中心世界に接合してい

る、いわゆる慣習的世界から、歴史的に慣習として伝えられている事柄を、それに従い、行為するのが常識として生活の中で習得することによってなされるのである。その上ある特定の事柄に関し、いわゆる国家、あるいは法人などのある特定機関の法的制度、規準に従って踏まねばならない手続きを強制する世界が慣習的世界の更に周辺にあり、個々人は通常この世界とかわりを持たないが、ある特定の必要が生じたとき踏まねばならない手続きを取らざるをえず、それについての KNOW-HOW は、国家あるいは法人等の広報、通達等を通じて得るのである。個々人はこうして自己中心の世界のみに存在しているのではなく、絶えずこの外部の世界と接し交流しながら存在しているのであり、むしろ個々人はこれらの外的世界の中に二重、三重に投げ入れられて存在しており、完全に純粋な自己中心の世界はありえず、それすらもこの外的世界との接合、交流によって内的に埋め尽くされている。それ故個々人は直接的には感性レベルにありながら、そのレベルを放棄することなく、悟性レベルにもあり、自己の世界を維持するのである。と云うよりは感性的自己中心的自己であるためにも、功利的・計算合理的思考のレベル、即ち悟性的レベルにあることを必要としているのであり、これは我々個々人が人間化された物質的、経済的基盤としての世界の中に投げ入れられた形で存在していることでもある。しかしここで云われる世界は飽くまでも自己中心の個々人にとり必要として広がり存在する世界であり、国家、法人などの法的制度の世界や人間化された物質的、経済的基盤としての世界も自己中心の個々人にとり必要と感ぜられ、受け止められる限りに置いて存在する世界である⁴⁹⁾。それ故このような現象学的立場での思考は確かに社会に生きる個々人の人間的な生活感情、情念、感動を「一定の事物の本質的なも

のを把握する唯一の手掛かり」⁴³⁾ とすることにより、純粹に客観的であることを標榜して自然科学的方法を取り入れるランドバークやパーソンの思考が没人間的となるのに反して、確かに人間的であるように受け取られうる。しかしこのような肯定的側面に反し、個々人が生活における物質的、経済的な事柄、及び文化的事柄に関心を持ち、それらに関わるとしても、それは飽くまでも自己中心的であり、この点で主体的であると思われても、それら関心事の物質的経済的基盤そのものについては無自覚的であり、それ故自己の関心、志向もこの基盤に支配されていることについても無自覚であり、それ故またこのような自己そのものも支配され、動かされていることについても無自覚の没主体的な人間として存在しているのである。これは明かに先の肯定的側面に対する否定的側面であり、現象学的立場のこの否定的側面は、個々人の意識の括弧で括られ、意識に還元された対象—世界のみがこの立場での対象でありうる故、自己の利害、意識に直接結び付くことのない対象—世界、即ち無自覚のまま留め置かれた物質的経済的基盤はここで対象として定立される世界の背後に放置されたまま残るという、云わば支配者に極めて都合な結果を与えることになる。物的、経済的基盤としての世界を支配し、歴史、社会を動かす支配者にとり自己中心の世界に留まる人間の温存こそは都合なのである。事実、支配者、行政官僚は公共の名の下での民衆抜きの行政施策を実行し、自己中心の個々人は自己に災難、不利が降り掛かって来て、初めて背後の権力を意識し、彼らは共通の利害に見出する一致点において連帯、団結し、抵抗の姿勢を示すが、この一致点を見出さざる共通の利害に差異、相違が生じると、その連帯、団結に亀裂が生じ、むしろ彼らの間に消し難い不和、対立が生じ、支配者に利することになる。それ故こ

こで先ず重要なことは、それが仮令認知の出発点であるとしても、単なる表面上の共通の利害の認知に留まらず、個々人たちにとり不利を真に生じせしめているものは、背後にあってそのような状況を生み出し、進めてくる支配者であること、このことについての自覚と的確な認識である。そして更に重要なことは、その地に住むことが喜びとなり、いつまでも住んでいたいと心地よく云いような人間的な生活の場、居住地を個々人が互いに連帯し、団結して作り上げることである。望まれるのは、そのような居住地が空間的には美的感覚に富み、見た目にも美しさが溢れ、心地よく、時間的には将来に対しても信頼し、安心しておれる人間の生活の場であることである。それ故人間の生活の場としての社会は、ただ単に力学的に構成される構築体だけではなく、それ自体また感性的次元、悟性的次元、理性的次元を内に蔵している一つの個体としての芸術作品に比せられる総体的な具体的存在としての社会であると考えられる。それゆえ社会についての認識、把握はこの具体的存在の総体的認識、把握であらねばならないが、これは先ずこの具体的存在から感性的に受け止められる喜怒哀楽の諸事象に見出された問題から出発し、そこで受け止められる具体的な問題を生ぜしめている諸要因の分析、抽象とその分析、抽象により明確化された諸要因の悟性的カテゴリーに則った総合、統一を介して再び、しかし今は概念的に明確にされ、より一層具体的となったものへ復帰することによってなされるのである。それ故問題となっている「個」としての個々のものそれぞれのの中に歴史的・全体的総体が作用していることを見出し、こうして「個」が単なる孤立的個ではなく、その存在自体が歴史的・全体的であることにより、全体的、あるいは総体的であることの認識が重要となるのである。認識は、それ故対象も認識の方法に

よって規定されるのではなく、対象の存在自体が総体的であることによって規定されているのである。否、むしろ認識者自体が社会の中において一個の総体的な活動的存在としての対象でもあり、このことを無視、忘却してはならないのである。

付記・補足

1. この論文で最初論じようとしていたのは実はこの最後に出て来た問題であった。しかし論じ始めると、その前提となるべきことが膨らんでしまい、最初の問題は論じないまま終わらざるをえなくなった。市民社会に生きる庶民の喜怒哀楽に満ち満ちた生活の描写により、近代市民社会を総体的に認識、把握していたゲーテやバルザックなどの近代作家に学ぶ点があるのではないか、そこでは感性的把握、悟性的把握はそれぞれ全体の中でそれぞれに適う場を得て作品を作り上げており、全体としての作品は紛ふことなく諸部分の集合体ではなく、一つの個性的作品としてある。社会の総体的認識、把握をめざす社会学もこのように社会をつかむことはできないか。この点で社会の見方を彼ら作家から学ぶことありはしないか。つまり彼等の美学を学ぶ必要が方法論としてありはしないか、と云うことが問題としてあるのである。

2. 本論で先ずカントの、「物自体 Ding an sich」は認識されえず、我々の認識しうるのは現象のみであるとの認識論に関し、自然科学の可能性を問題とする限りは、全体としての自然の探究の可能性を示す目標、理念として有意味的に理解することもできると述べたが、しかし人間の作品としてではなく、それ自体客観的には人間の存在と無関係に独自に存在する自然とは異なり、それ自体も人間の作品である社会の認識、把握において作者自身にと

り認識しえない「物自体」相当のものを社会の背後に残しておくことは何を意味しているのであろうか。そのような社会認識が果たして真に社会認識と云いうるものであろうか。社会を認識しようとするものは自らこの点で自らを問うべきであらう。

社会学における本質的と云うこと（注）

- 1) 「理性の戦いはまさに、悟性が固定してしまったものを克服することにある」。
G. W. F. Hegel, "Enzyklopädie." Erster Teil § 32.
- 2) I. Kant, "Kritik der reinen Verunft."
II Ausgabe. X X VI (Philosophische Bibliothek).
カント『純粋理性批判』（上）篠田英雄訳、岩波文庫、p.40.
- 3) ibid. B. 134~135. カント『純粋理性批判』（上）篠田英雄訳、岩波文庫、p.177~178.
- 4) ibid. B. 537f., カント『純粋理性批判』（中）篠田英雄訳、岩波文庫、p.185.
- 5) エンゲルス『自然弁証法』『マルクス・エンゲルス全集』20. p.346.
- 6) Thomas Hobbes., "Leviathan or the Matter, Form and Power of a COMMONWEALTH Ecclesiastical and Civil," The Introduction p.IX (Basil Blackwell Oxford, 1946)
ホッブス『リヴァイアサン』（一）水田洋訳、岩波文庫、p.37.
- 7) 山下淳志郎『倫理学』§30. プラグマティズムの倫理思想」の章参照。
- 8) Charles Peirce., "The Fixation of Belief" in "The American Pragmatists"., p.91. (Meridian Books, Inc., New York)
- 9) ibid. p.92.

- 10) *ibid.* p.94.
- 11) *ibid.* p.96.
- 12) *ibid.* p.88
- 13) William James., "Pragmatism's Conception of Truth" in "The American Pragmatists", p.46~48.,53.(Meridian Books, Inc., New York), W. ジェイムズ『プラグマティズム』 柘田啓三郎訳、岩波文庫、p.149., 160.
- 14) エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』「マルクス・エンゲルス全集」2., 都築忠七編『資料イギリス初期社会主義——オーエンとチャーティズム——』平凡社参照
- 15) この点に関し私たちはデュルケーム、マンハイム、ルカーチらによる新たな問題の提起とそれへの接近を見ることができる
- 16) この点に関して渡辺洋三著『法とは何か』Ⅱ「市民法と現代法」岩波新書が参考になる。
- 17) この点に関してマルクスが中国の阿片戦争における「イギリス人の残虐行為」を非難して次のように述べていることは参考になる。「われわれは人命と道徳を犠牲にして年々イギリスの国庫を肥やしている不法なアヘン貿易について何ら聞くとこがない。…われわれは欺かれ、奴隷にされ、ペルー海岸での奴隷以下の境涯やキューバでの奴隷労働に売り飛ばされた移民たちにくわえられている『死にいたるまで』の虐待についても何ら聞くとこがない。……われわれはこれらすべてのことや、さらに多くのことについて何も耳にしない。第一に中国の外にある人々の多くはこの国の社会的、道徳的状態について関心をもたないから、また第二に、政治と分別とは、何の金銭的利益を得られない問題をかきたくないことを得策とするからである。こうして、自分が茶を買う雑貨屋の店より遠くには目の及ばないイギリス本国の国民は、内閣と新聞とが公衆に鵜呑みにさせようとするすべてのデマ説明をいそいそと呑み込むのである」。
- (マルクス『イギリス人の残虐行為』「マルクス・エンゲルス全集」) 12.
- 18) ここでは意識の操作としての意識産業の展開が考えられる。エンツェンスベルガー、『意識産業』 晶文社、及び Th. アドルノ『半教育時代』(『ゾチオロギカ』所収、イザラ書房) 及び Marx-Engels "Deutsche Ideologie" I. A) 2 Über die Produktion des Bewusstseins. p.37~65., マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』第一章、A の二「意識の生産」(国民文庫、p70~96) 参照
- 19) Hegel: "Vernunft in der Geschichte", Philosophische Bibliothek. s. 105., 河野正通『ヘーゲル、歴史哲学緒論』P.141., 尚マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』真下信一訳、p.89~94., (国民文庫、大月書店) 参照
- 20) マックス・ホルクハイマー、山口祐弘訳『理性の腐食—道具的理性批判—』せりか書房、本書は元々英文で書かれたが、後、アルフレッド・シュミットにより「道具的理性批判 (Zur Kritik der instrumentellen Vernunft)」との題名で独訳された。
- 21) I. Kant, "Kritik der reinen Vernunft." II Aussage.B.197.(Philosophische Bibliothek)
カント『純粹理性批判』(上) 篠田英雄訳、岩波文庫、p.233.
- 22) *ibid.* A. 111.
カント『純粹理性批判』(下) 篠田英雄訳、岩波文庫、p.159.
- 23) K. Marx "Das Kapital" 7ter Abschnitt. 23tes Kapitel. 3. Progressive Produktion einer relativen Übervölkerung oder industriellen Reservearmee. (DIETZ

- VERLAG BERLIN 1985). p.657ff., K. マルクス『資本論』第一巻、第7篇、第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」、第3節「相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産」以降（国民文庫『資本論』第4分冊p.170ff）参照
- 24) G. A. Lundberg, *Foundation of Sociology*. 1964, p.83~84. 以下のランドバーク、パーソンズに関しては尚、Don Martindale. "The Nature and Types of Sociological Theory", p.119~121, 421~425, 484~490. [新陸人他訳『現代社会学の系譜』(上) 146~149、(下) 454~458, 519~526] 及びNicholas s. Timashef "Sociological Theory—Its Nature and Growth—", p.192~196, 242~249.並びに拙稿『社会学における「実証的」ということ』、社会学科研究報告第12集、(昭和55年3月) 参照
- 25) *ibid.* p.54~55., 112
- 26) *ibid.* p.112., Roscoe c. Hincle JR & Gisela J. Hincle "The Development of Modern Sociology" p.56 (RABDOM HOUSS NEW YORK)
- 27) Roscoe c. Hincle JR & Gisela J. Hincle "The Development of Modern Sociology" p.56
- 28) T. Parsons, "The present position and prospect of systematic theory in Sociology" in "Essay in sociological Theory", revised ed. p.219
- 29) *ibid.* p.214
- 30) *ibid.* p.214~215, 217.
- 31) T. Parsons, "Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives" p.10. (Foundations of Modern Sociology, Prentice Hall, Inc.), 矢沢修次郎訳『社会類型—進化と比較—』p.14. (至誠堂)
- 32) *ibid.* p.11., 同訳書、p.15.
- 33) *ibid.* p.11., 同訳書、p.16.
- 34) *ibid.* p.11., 同訳書同前。
- 35) *ibid.* p.113., 同訳書、p.169.
- 36) *ibid.* p.113~114., 同訳書、p.170.
- 37) Henri Lefebvre, "Sociologie de Marx" p.110., (Presses Universitaires de France) 山下淳志郎訳『マルクスの社会学』(せりか書房) p.158.
- 38) G.W.F.Hegel, "Phänomenologie des Geistes", s.285.(Philosophische Bibliothek). ヘーゲル、金子武蔵訳『精神現象学』上巻p. 399. (ヘーゲル全集4. 岩波書店)
- 39) G.W.F.Hegel, "Grundlinien der Philosophie des Rechts". § 183. (G. W. F. Hegel Werke. 7. SUHRKAMP).
- 40) Henri Lefebvre, "Sociologie de Marx" p.114~115., (Presses Universitaires de France), 山下淳志郎訳『マルクスの社会学』(せりか書房) p.164.
- 41) G. W. F. Hegel. "Phänomenologie des Geistes".s. 16, 32, 44, 67f. (Philosophische Bibliothek) ヘーゲル、金子武蔵訳『精神現象学』上巻pp. 11f, 34f, 50, 80f. (ヘーゲル全集4. 岩波書店)
- 42) ここでは例えばメルロー・ポンティ (M. Merleau Ponty) の次のような思考が見られる。「私の状況 (ma situation) を通して、私と云う存在が私にとって有意味的なあらゆる行動、あらゆる知識に繋がりをもつと云うことを一度認めるならば、私の状況と云う枠の中での、私と社会的なものとの接触こそ、科学的真理を含む一切の真理把握の出発点となると云うことが明かになる。」M.Merleau Ponty, "Le Philosophe et la Sociologie" dans "Signes" (Gallimard, 1960) p.137. 尚、A. シュッツ (Alfred Schutz) ["On

Phenomenology and Social Relations”
(The University of Chicago Press, 1970),
森川眞規雄、浜日出夫訳『現象学的社会学』
や次に引用されるJ. Monnerot の主張など
が注意される。

43) J. Monnerot, “Les faits sociaux ne sont

pas choses”, p.23., 尚彼は次のようにも述
べる。「社会学とはいわゆる主体の限界のな
かに閉じ込められない限りでの主体的なものを記述することである」。

(やました・じゅんしろう、本学名誉教授)